様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５３１１０６

研究課題名（和文）国語科教育における語彙教育の実践史研究～実践の生成過程を明らかにするために～

研究課題名（英文）A Study of Practical History in Vocabulary Education

研究代表者
中村　和弘（NAKAMURA, Kazuhiro）

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：５０５１１１８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、東京都青年国語研究会がどのように語彙教育の実践に取り組んできたのか、その過程を明らかにしようとするものである。一連の実践は「語い指導」とよばれ、昭和49年度から20年間にわたって継続して取り組まれてた。会の『研究紀要』などをもとに毎年の実践を分析した結果、①研究授業や協議会でのやりとりを通して、②倉澤の語彙教育論の形成と実際の授業実践の生成とが撚り合いながら、③特徴的な語彙教育を生み出してきたことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the process how Tokyo Youth Japanese Research Society has worked for vocabulary education practice. Its vocabulary education is called "GOI-SHIDO" , which was practiced for 20 years since 1974. In this study, I analyzed the research bulletin of this research society. As a result, it was revealed that: ①They have improved their practices through lesson study, ②It overlaps the actual teaching and the concept of vocabulary education of KuraSawa, ③Characteristic vocabulary education was generated.

研究分野：国語科教育学

キーワード：語彙教育　実践史研究　倉澤栄吉

１．研究開始当初の背景

(1) 国語科教育研究における語彙教育の領域では、1990 年から 2000 年にかけて、甲斐睦朗、塚田泰彦、井上一郎ら各氏によって、それまでの語彙教育をめぐる様々な授業実践や実践を支える理論についての集積・整理、分析がなされてきた。

三氏の研究に共通なのは、それまで個々に展開されていた語彙教育に関する実践や理論を一度網羅し、それらを何らかの目的、観点から分類・整理、分析することを通して、語彙教育の今後の展開に対する知見を引きだそうとしたところにある。個々の語彙教育論をメタ的に論じるこれらの研究が進展してきたことにより、語彙教育は新たな研究の枠組みを得た。

(2) その一方で、その後の語彙教育研究は、三氏の研究以降大きな進展を見せていない。

学習基本語彙に関する研究とそれと関連する「学習用語」の研究とは展開されているものの、研究方法そのものを問うような研究発表は、全国大学国語教育学会等の学会発表においても数年なされていないのが現状である。甲斐、塚田、井上らによる「個々の語彙教育の実践や理論をメタ的に論ずる」という研究手法に対して、「次の一手」となる研究方法の開発が急務であった。

この「次の一手」として、「実践史研究」を語彙教育研究の領域に導入した。先の三氏が、個々の語彙教育の実践や理論を収集し、俯瞰的に分析しながら、研究の枠組みを拡大したのに対して、「実践史研究」は、特定の語彙教育の実践に密着し、そこで展開された一回一回の授業や協議会の内容を収集し、実践が生成・変容していくそのプロセスを明らかにしていこうとする研究方法である。

(3) 「実践史研究」の意義としては、次の二つを挙げることができる。

①90 年代以降の語彙教育研究の枠組みは、個々の語彙教育の実践や理論を収集し、俯瞰的に分析しながら新しい知見を引き出す方向で拡張した。それに対して、「実践史研究」は真逆にアプローチする。すなわち、個人なり研究団体が取り組んだ一回一回の授業を集積し、その授業がどうつながって語彙教育の実践が形づくられたのか、あるいはどのように実践の理論が生み出されていったのか、その生成と変容のプロセスを追っていくものである。

②「実践史研究」という研究方法そのものは、国語科教育研究においては既に取り組まれている。浜本純逸（文学教育）、菅原稔（作文・綴り方教育）、渡辺春美（古典教育）らによる研究が知られるところである。しかし、語彙教育の領域では、管見の限りこうした研究は行われていない。他領域での方法論を参考にしながら、語彙教育研究においても「実践史研究」が導入されることで、新たな展開が期待できる。

２．研究の目的

(1) 本研究の目的は、民間の教育研究会おいて、特色ある語彙教育の実践がどのようなプロセスを経て生成していったのかを明らかにすることである。具体的には、倉澤栄吉の指導のもとで、昭和 49 年度から 20 年間にわたって語彙教育の取り組みを継続し、「語い指導」とよばれる特色ある実践を生み出した東京都青年国語研究会（青国研）の活動を対象とした。

(2) その理由として次の二点を挙げることができる。

①塚田泰彦は、これまでの語彙教育の実践は、国語学における語彙論研究を基礎とした実践と単元学習等の学習論を基礎とした実践の二つのアプローチに大別できるとしている。前者は教育科学研究会による「語彙教育」や児童言語研究会による「言語要素指導」があたり、後者は青国研や島根国語懇話会による「語い指導」が相当する。青国研による取り組みは独自の「体系」と「方法」をもっており、語彙教育の実践としてきわめて特徴的である。

②青国研による「語い指導」は、昭和 49 年度から平成５年度までの 20 年間にわたって継続して取り組まれた。実践は月例会ごとに授業提案と協議会、指導者による講演などが積み重ねられており、20 年間で 198 本の研究授業が行われた。それらの活動の成果は２冊の研究図書として刊行されたが、それ以外に、『研究紀要』というかたちで年度ごとにまとめられている。『研究紀要』にはその年度の活動の多くが記録されており、その分析を通して会の実践の様子を明らかにすることができる。

(3)授業と協議を重ねながら教師集団が一つの特色ある教育実践を生み出していったその過程をたどる実践史研究を通して、特色ある語彙教育研究の内実と生成のプロセスを明らかにすることがねらいである。

３．研究の方法

(1) 本研究では、実践史研究によって、青国研による「語い指導」の教育実践を明らかにするために、次の三点の方法をとった。

①会の『研究紀要』を分析し、１年ごとの研究授業・研究協議会の様子、倉澤の講義内容を明らかにする。その分析をベースに、年度間の実践の変容を明らかにする。

②下の研究主題ごとに数年単位でア）の分析を束ね、それぞれの時期の語彙教育実践の特徴を明らかにする。

「語い指導の模索」期（49～51 年度）

「語感指導」「言葉遊び」期（52～55 年度）

「文字指導」期（56～59 年度）
「個別学習に根ざす指導」期（60～元年度）
「生活に根ざす指導」期（2～5 年度）
③会を指導した倉澤栄吉の語彙教育論が、実践の展開に合わせてどのように進展していったのかを明らかにする。

(2)同会の初期３年分（49～51 年度）の実践の分析は既に行っているため、本研究ではこれまでの分析手法、記述方法に改良を加えながら、残りの期間についての研究の対象とした。

４．研究成果
(1) 昭和 52 年度以降、青国研による語彙教育の実践が、倉澤の教育論の展開とともにどのように生成していったのか、時期ごとにまとめると次のようなことが明らかになった。

(2)「語感指導」期
昭和 52 年度の『研究集録』の記録を見てみると、実は語感を育てるということに関して確固たる内容や指導方法が先にあり、それを研究会で取り組み、具体的な実践事例を開発したというわけではないことがわかった。倉澤は「語形」「語義」「語感」の三角形の構造を示しながら実践を整理しており、年度末の段階で 11 項目の目標分析が明らかになっている。

(3)「ことば遊び」期
この時期の青国研の「語い指導」は、倉澤による「歴史性」「位相性」「機能性」という提示を受け、特に「歴史性」「位相性」に目を向けた語彙教育を具体的にどのように展開させていくのかという、学習指導上の課題を抱えながら試行錯誤していたことがわかる。同時に、そのことが、授業の中に積極的に「ことば遊びの手法をとりいれる」という、実践上の工夫を産み出すことにつながったものと考えられる。

(4)「文字指導」期
選定語いを核とした単元開発と同様、選定語いに漢字を置き、語い指導の単元として文字（漢字）の授業を構想された。倉澤によって「漢字を包む語いの体系や言語生活の体系の中から指導して」いくことや「漢字が素直に習得できるような体質に、子どもたちの言語生活を改善していく」ことなどについて提案があり、漢字の学習と言語生活とをつなぎ合わせながら、学習指導の方法を検討することが取り組まれた。

(5)「個別学習に根ざす指導」期およびに「生活に根ざす指導」期
昭和 60 年に倉澤より「語い指導的教育方法論」が提唱された。これは、生活綴り方教育論のように教育課程全体を含み込んだ広い教育方法の立場による考え方であり、倉澤は、「教科指導を大いにすることが、同時に生徒指導であるという一元論的方法に立つべきである」としている。その方向から、語い指導の学習活動は、国語科の範囲を超えて、社会科的な内容、理科的な内容も包み込んだ通教科的な特徴をもち、また学習者の生活につながるものが求められるようになった。同時に、教師の指導も、学習者の追求がその子にとってその語いを核とした意味のある一まとまりのものとなるよう「個別化」していくものとなっていった。

(6) 以上のように、青国研よる語彙教育実践は、先に内容と方法があって、それを具体化していくというのではなく、倉澤による提案や示唆を受け、実際の授業や協議を繰り返しながら、少しずつ内実が形作られていったことがわかる。
倉澤の国語教育論形成は、常に現場教師との相互交流を大切にする中で行われてきたことは、既に田近洵一によって明らかになっている。青国研による語い指導においても、研究会内部でのやりとりを通して、倉澤の語彙教育論の形成と実際の授業実践の生成とが互いに撚り合いながら、特徴的な語彙教育を生み出してきたことが、本研究を通して明らかとなった。

＜文献＞
田近洵一「倉澤栄吉『新単元学習論』の特質と　今日的意義」（日本国語教育学会編『豊かな言語活　動が拓く 国語単元学習の創造 Ⅰ　理論編』東洋館出　版社、2010 年、pp.208-221）。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計６件）

① 中村和弘「語彙教育における『語い指導的教育方法』の実際とその意義」全国大学国語教育学会第 128 回兵庫大会、2015 年 5 月 31 日、兵庫

② 中村和弘「語彙教育における漢字指導のあり方に関する研究」全国大学国語教育学会第 126 回名古屋大会、2014 年 5 月 18 日、愛知

③ 中村和弘「ことば遊びを取り入れた語彙教育の実践史研究」全国大学国語教育学会第 125 回広島大会、2013 年 10 月 27 日、広島

④ 中村和弘「国語科学習用語をめぐる研究の展開と実践上の課題」東京学芸大学国語教育学会、2013 年 5 月 25 日、東京

⑤　中村和弘「語彙教育における『語感指導』に関する検討－倉澤栄吉氏の語感指導論を手がかりに－」、全国大学国語教育学会第 123 回富山大会、2012 年 10 月 28 日、富山

⑥　中村和弘(「『語感を磨く語い指導』の実践生成過程に関する研究」、全国大学国語教育学会第 122 回筑波大会、2012 年 5 月 27 日、筑波

〔図書〕（計４件）

①　大熊　徹・山室和也・中村和弘編著『国語科授業を活かす理論×実践』東洋館出版社 、pp.96-109、2014 年

②　国語科コアカリキュラム研究プロジェクト編『国語の授業の基礎・基本－小学校国語科内容論－』、東京学芸大学出版会 、pp.56-68、2014 年

③　東京学芸大学国語教育学会編『子どもが生きる国語科学習用語』、東洋館出版社 、pp.100～101、2013 年

④　④『全国大学国語教育学会編，国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』、学芸図書 、pp.325～332、2013 年

６．研究組織
(1)研究代表者
中村　和弘（NAKAMURA,Kazuhiro）
東京学芸大学教育学部准教授
研究者番号：　２４５３１１０６